

サロニエール
 ベル・エポックのイタリア社交界女性とその小説世界
 — アニー・ヴィヴァンティ Annie Vivanti [アン・ジョージ・マリオン・ヴィヴァンティ
 Anne George Marion Vivanti] (1866-1942) 著短編小説集『感激 GIOIA!』
 (Firenze, R. Bemporad e figlio 1921) 邦訳 (その2)

清 瀬 卓

〈Sommario〉

La presenza straordinaria di Anne George Marion Vivanti, scrittrice cosmopolita e poliglotta d'origine ebraica è soltanto paragonabile a quella di Edith Wharton (1862-1937), romanziera contemporanea di cittadinanza newyorkese nella storia della cultura internazionale dell'epoca moderna. La Cleopatra moderna pur avendo un successo formidabile nel pubblico dei lettori, non sarebbe dovuta nascere nel suo periodo. Infatti, non veniva compreso e valutato in un modo giusto il suo mondo romanzesco piuttosto scandaloso di carattere autobiografico.

Nel racconto vivantiano, tradotto in giapponese per la prima volta nel presente saggio di traduzione, si tratta di un episodio un po' aneddotico del rapporto amoroso della nostra musa giovanissima con il poeta *doctus* italiano di fama internazionale del tempo.

VIII. アポロン フェアール — カルドウッチの想い出
 (L' Apollinea Fiera — RICORDI DI CARDUCCI)

カルドウッチが、私にこう云った。

「王妃と話したいかい？」

「ええ、冥府神さん」——大喜びで、私は返事をした。

「ここで待っていなさい。その旨を伝えてくるから。」

カルドウッチは、グルソネエ・ラ・トリニテ¹⁾へと続く急な坂道に沿って進んで行こうとした。丘の頂に日の光りに照らされて将校たちの一団がいた。

彼らの中央で、水色の面紗がヒラヒラと風にたなびき、金髪がキラキラ光っていた。それが、阿爾卑斯大隊を閲兵するマルゲリータの姿だった。彼女は絵のようなグルソネエ風衣装を纏っていた。つまり、緋色の短い洋袴に黒の天鵞絨の胴衣を着て、水色の大きな面紗で顔を覆っていた。

「ちょっと待って。お願い。」——私はカルドウッチを追いかけた。彼は立ち止まって——「王妃に、どう話しかければよいのやら？」と訊く。

「あなたが話すのではなく、王妃の方が話されるはず。ちゃんと返事をして、私に恥をかかせな

いように注意して下さい。」

再び、カルドウッチは道を辿ろうとした。ところが、まだ何歩も進まないうちに、またまた立ち止まって、私の方を振り向くと、「お願いだから、いつものように森をぶらつかないように。」と手厳しく小言を云った——「分かったかい？ ほくが呼ぶまで、じっとして居るのだよ。」

「ここに居るわ。」——私はそう返事をした。そして、私は落ち着かない気分で、大人しくその場に居残って、バッファロー・ビル²⁾風の大きな灰色の縮絨獣毛帽を被った背の低い彼の逞しい姿が、洋杖を突きながら遠ざかってゆくのを眺めていた。

急に、私はパニック状態に襲われた。丘の頂でキラキラ光っている一団に彼がだんだん近づいて行くにしたがって、ますます私の不安は増大した。まるで自分自身がその坂道を上ってゆくような気がしたのだ。息が詰りそうになって、動悸が早鐘のように打っていた。左手の方へ行くと、こんもりした静かな緑の林があった。林は、私にそこへ避難するようにと手招きをしていた。

その時、私は炎上する貨物船の見習い水夫のことを詠った英語の詩《白壁の館》のことを思い出していた。父親が、彼に向かって云っていた——《俺が戻るまでここに居るのだ》と。

《少年は炎上する甲板に突っ立っていた

The boy stood on the burning deck

彼以外の全員が立ち去ったその場所に…

Whence all but he had fled. . . .》

水夫たちが救助艇から《こっちへ来い、逃げるのだ！》と叫んでいたが、無駄だった。少年は《居残れ》と云われていた。だから、彼はその場を離れなかった。炎にまかれてしまった父親は、無論のこと戻って来ない。少年は動こうともしない。彼もまた炎に呑み込まれてゆく。

頭の中で、いつも私は雄々しく浪漫的な想像を逞しくするのだった。平々凡々とした状況や人生の些事の中でも、私は自分が筆舌に尽くせない偉業の主人公役を演じている気になるのだった。

確かに、それは普通に経験するような出来事ではなかった。王妃と話すことなど！ しかも、ほんの一瞬こっそりと素敵な妖精譚から抜け出してきたように思える王妃とお話することなど。その妖精たちは、雪を戴く阿爾卑斯山脈と眩しい空を背景にして、水色の面纱を靡かせていた。

見ると、一団が分かれて詩人の方へ赴こうとしていた。やがて、人波が出来て二人の主要な人物の周囲を取り巻いた。

程なくして、一団は再び広がった。一人の人物が他の人々から離れ、私の方へ坂を降りてきた。カルドウッチではなかった。輝くばかりに垢抜けした一人の将校——砲兵隊長だった。いつも詩句が頭の中で踊っている私は、ついこの間学校で覚えたばかりの素敵なジョヴァンニ・リッツイ³⁾の童謡をふと思い出していた。

《むかしひとりの礼儀正しい騎士がいた。

学があって名門出の勇敢な男で、
領国のために戦ってきたのだった。
黄金の砲兵隊長と呼ばれていた。
黄金製の拍車と兜を着けていたから。
特に、その心根がそうだった。》

黄金の砲兵隊長は私の前で立ち止まり、騎士らしく凛とした敬礼をしながら自己紹介をした。

「アランソンです。」——彼は云った。

私はお辞儀をしながら返事をした。

「王妃が、妃殿下のところへあなた様を連れてくるようにとお命じになりました。」

「光栄です。」——私は震えながら呟いた。彼と並んで、私は急な緑の斜面を登っていった。

黄金の砲兵隊長！…あの日以来、初めて貴方に再会して、まだ間がない。貴方は隊長ではなかった。灰色の蠶の中尉の制服を着ていたから。

貴方の側で、二人の令嬢が微笑んでいた。

貴方は軍人風の威厳ある雄々しい態度で挨拶しながら、私に「アランソン」とあらためて自己紹介をした。そして、あの遥か昔の輝かしい日のことに、またもや言及した…「グルソネエ…王妃…憶えていますか？」

そうだ、私は思い出した。

そうだった。昨日もまた、私は貴方に会った。昨日のことだ！貴方は自分の寝台に横たわって、ジッと身動きひとつしなかった。貴方は誰にも挨拶しなかった。貴方がとても愛している王妃が貴方の部屋に入って来られたとしても、起き上がりもせず、ジッと横たわったままで、敬意を表すか、あるいは芳香であなただけを包んでいる花の中から一輪だけを差し出したりはしなかっただろう。

貴方の側で、二人の令嬢が泣いていた。

貴方は時間から抜け出て、勝ち鬨の声を上げていた。かの輝ける遥か昔の日と今日とを隔てていた灰色の重苦しい歳月は、擦り切れた塹壕戦用外套のように、貴方の手で終止符が打たれて、もはや消え失せていた。そして、貴方は生死の境から抜け出て、美しい制服を着て自信に溢れ、胸に勲章を付け、佩剣を手にしていた…貴方の姿を見つめると、何年も忘れていた古い詩句がまたもや思い出されてくるのだった。

むかしひとりの礼儀正しい騎士がおりました。

学があって名門出の勇敢な男で…

《王冠の金剛石の光りに包まれて》、王妃は私を待ち構えていた。彼女の側で、カルドゥッチ

は直立不動の姿勢を取っていた。私に向けられた彼の眼差しに、何か心配して気遣っているような様子を感じ取った。周囲の将校たちも、黙って眺めていた。

私の驚きは、ますます増大した。(ああ、^{モミ}樅の森の静けさ！)

ところが、王妃が微笑みながら私に片手を差し伸べたので、その微笑に接すると、私の臆病風は一挙に霧散した。彼女は私に話しかけた。そのとたんに、この世で私たち二人だけのような気がした。これが王侯貴族本来の徳性なのだろう、彼女は話しかけながら、私のことは何もかも承知していて、私のこと以外は何も興味が無いといった印象を与えた。

…その日の午後のミーラヴァッレ Miravalle の^{テーブル・ドート}宴席では(私は、カルドゥッチとピエーロ・ジャコーザ Piero Giacosa との間の席に着いていた)、王室の一般参賀が大きな話題になった。私はほとんど話さなかったし、カルドゥッチは黙ったままだった。(そうなのだ。彼は《熊のような気質で》、別にことさら発言すべき重要なことがらでなければ、黙っていたいのだった。)でも、ピエーロ・ジャコーザは大いにまくし立てていた。そして、午前中の催しものから王妃の評判に話題が移ると、彼は次のような意見を述べた。

「そう、マルゲリータ Margherita は実に王侯然としている。でも、同時に…根っからの女でもある。」

「というと？ どうしてなのでしょう？」— 居合わせた多くの婦人たちが訊ねた。

ピエーロ先生は、私の方を振り向いた。

「初めて私が貴女のことやその詩作品について彼女に話をすると、女王陛下は即座に私の話を遮って、まったく女らしい質問をしましたものです— 《ところで…美人なの？》と。」

他の婦人たちと唱和するように、私は訊ねた。

「で、どうお返事なされたのです？」

私は白状するが、彼の返事を待っていても、気がかりでなかった訳ではない。

「私は返事をした。」— ジャコーザは、それから私の方を振り向いて、^{あいそ}愛想のよい^{ほほえみ}微笑を浮かべて云った— 「美人ですって？ 彼女は…女王陛下、最低です。」

「最低ですって？ どうして？」— 婦人たちは訊ねた。

「最低ですって？ どういう意味なのですか？」— 少なからず侮辱された私は詰め寄った。

ジャコーザは、あらためて私をジッと見つめ、ニコッと笑った。

「気を悪くしないで頂きたい。それは、ご機嫌取りの返事だったのです。」— 彼は云った。

そこで、私も大いに慰められて、^{ほほえみ}微笑んでいた。

「的外れな返事だった。」— 不意にカルドゥッチが大声で窘めた— 「同じ評判を下す権利が、彼女に与えられていなかった。」

呵責の念を覚え恥ずかしくなって、一同は押し黙ってしまった。私は微笑みながら、どう対処したらよいのかわからなかった。私たちが沈黙しているなか、運よく^{ウェイター}給仕たちが^{ロースト・チキン}丸焼き鶏肉を^{エメラルド サラダ}翡翠色の生野菜の付け合せと共に広間に^{うやうや}恭しく運んで来た。

^{ウェイター}給仕が^{いんぎんぶれい}慇懃無礼ながら^{わるき}悪気のない態度で、私の前に差し出した料理を眺めて、私は大きな黄色

い声で警句を口走っていた。

《鶏肉はビューン、七面鳥はヨチヨチ。》

そして、私は手羽肉から手をつけた。

カルドゥッチは陰気な顰めっ面をして、咄嗟にこちらを振り向いた。

「ええ？ 何だって？ 何と云ったの？」

私は洒脱な警句をもう一度くり返した。

「これって詩なの。」——私は説明した——「その心は、鶏肉は手羽を、…は腿肉を頂く必要があるってこと。」

カルドゥッチは憤慨したように私のことばを遮ると、——「何が詩だ！」——頭に来て我慢ならぬといった感じで、肩を揺り動かしながら、叫んでいた。

誰かが笑った（おそらく私だったのだろう）。すると、嵐は去っていた。

カルドゥッチが親友のピエーロ・ジャコーザに腹を立てたのは、その時だけではない。才気煥発のピエーロ・ジャコーザは、冗談を口にするのが好きだった。カルドゥッチは冗談が好きでなかったし、そうした冗談を飛ばすなら、まったく子供騙しの簡単なものでなければならなかった。曖昧なことばとか、どうとでもとれる文句を彼は毛嫌いしていて、すぐに不機嫌になった。

その通りで、彼はめったに笑顔を見せず、笑うことがなかった。

その日の午後、ミーラヴァッレの庭園に、馭者のチョッカがピアナッツォ Pianazzo⁴⁾ からやって来た。ホテル住まいの3名のセツラ-ザネッティ Serra-Zanetti 夫人のひとりのためにと、彼は一頭の乗用馬の手綱を握っていた。でも、悪天候で、夫人は外出を望まなかった。お人よしのチョッカは、その馬を連れて帰って行こうとした。私が彼の姿を見かけたのは、カルドゥッチを誘って〈瀧灘〉亭で昼食をとろうと、ホテルを出ようとしていた時だった。

「あの馬のことはかまわないでおきなさい」——離れた場所から、それと察しが付いたカルドゥッチが、私に向かって云った。私には馬を見かけると、鼻面に接吻する癖があった。街なかでも、私がどんな荒馬にも手を出そうとするので、彼はとても苛立っていた。カルドゥッチは、舗道沿いに鬱陶しい駄馬が頭を垂れ膝を曲げてじっとしている姿を認めると、いつも遠くから叫んでいた——「あの馬のことはかまわないでおきなさい」と。

でも、手の届く距離にじっとしているチョッカの馬をかまわないでおくことは不可能だった。その茶色の鼻面は、長くて気品があった。鬣は前髪のように切り揃えてあって、額のまん中には白い星のしるしがあった。

ピアナッツォへ赴こうとしていたので、チョッカは乗りなさいと誘い、すっかり興奮した私はその申し出を受け入れた。

でも、鞍にどうやって私を乗せたものか、彼もカルドゥッチも分らなかつた。ちょうど給仕が持ってきてくれた踏み台を助けに、無様な格好で、よじ登ろうと悪戦苦闘している最中に、ジャコーザが姿を見せ、近づいてくると、無造作にヒョイと私を鞍の上に乗せてくれた。

「変わった鞍ね、」——私は鐙に足をかけて、手綱を英国流に指に巻きつけると、意見

を云った——「角が一本多すぎるようだよ。」

ジャコーザは笑って、「行く土地で…出遭うのは角」と云った。そして、彼はカルドウッチの方を向いてニコリした。

ところが、《冥府神》の方は、急に減入った時の表情になって、先生を険しい眼つきでジッと睨み付けた。

「それって、どういう意味なのだ？」——声を震わせながら、彼は問い詰めた。

「いや、別に意味なんてないよ。」——ピエーロは、愛想よく返答をした。

その平靜さが、なおさらカルドウッチの機嫌を損ねたようだった。彼が齒を食いしばり、拳にグッと力を入れる様子が分かった。

「南無阿弥陀仏！ …」——私は思った——「仲裁に入らなければ！」——そこで、馬上から（今朝の評判を思い出して）宣告を下した——《鶏肉はビューン…》と。

しかし、鶏肉があったわけではなかったので、その文句は空振りしてしまい、カルドウッチの怒りは収まらなかった。

ジャコーザは早々と退散するにこしたことはない。機転を利かせ、私は私でそっと拍車を入れて、チョッカの馬を後ろ脚で立たせ、陽動作戦を展開しようと躍起になった。

ところが、それは、後ろ脚で立てるような馬ではなかった。むしろ、思案げな用心深い馬で、蠅が邪魔する度ごとに、立ち止まっては面倒臭そうに蹴り上げるのだった。

「チョッカ、待って頂戴。」——私は云った——「この馬はお座りして、風景を眺めていたいのよ。私は下りることにしたいわ。」

「駄目です、駄目です！」——チョッカは手綱を掴み、無気力な四足獣を表街道へと引張ってゆきながら、大声で云った——「どうぞ乗ったままでいて下さい。恐がらないで！」と。

怖がるですって、騎手さながらの乗り手の私が…

こんな格好で、私は片やカルドウッチに、片や手綱を握っているチョッカに先導されて、黄昏の夕陽の中を進んで行った。誰にも出遭うことがないようにと、私は心の中で願っていた。ところが、不運なことに、グルソネエやサン-ジャン Saint-Jean やトリニテの休暇客が、その時間に挙ってその通りで落ち合う約束をしていたかのようなようだった。ライ医師や、ヴィヴァンテ先生や、デツァ青年や、その谷間に集う婦人も令嬢も皆が居合わせていた。私は、恥ずかしい思いでいっぱいだった。もし王妃に見られでもすれば、死んでしまいたい私は思ったほどだった。

しかし、王妃は壮麗な〈ペッコーズ荘 Villa Peccoz〉⁵⁾ から外出しなかったし、馬の望み通りに私たちは〈瀧灘〉亭に着いていた。

私はしょんぼりと鞍から滑り降りるようにして、地面に足をついた。

「乗馬が上手だね」——怒りを忘れてしまったのか、カルドウッチが云った——「君の姿を眺めていると、ワルキューレ Valchirie のことを考えてしまった。」

すると、チョッカは彼を飲ませようと、毎日のごとく足並みの揃わない彼の駿馬 bucefali の一頭をホテルへ連れて来た。私は鞍に跨ると、小径や野原へと出かけた。カルドウッチは話し

かけもせず、私に眼もくれずに、身振り手振りをまじえモグモグ独り言を呟いては、思索と詩作を重ねながら、歩いて付いてきた。

《金髪ブロンドのワルキューレよ、嬉々ききとして馬むちを鞭打ち、
黒雲の上を遊泳ゆうえいしつつ、大空を突くその鬣たてがみは…》

ある日の夕べ、トリニテ高原たたずに佇みながら、夕焼けの光りに照らされて燃えるような岩の高みから、飛沫しぶきがあたり一面ほとぼしに迸っている滝を眺めた。

「ご覧よ、黄金色こがねいろの水面を」——彼は私に云った。

彼の云う通りにした——「水じゃないわ」——私は意見を述べた（カルドウッチに私は思い浮かんでくるたわいもないことを何でも話した）——「あそこの高いところに、妖精フェアリーたちが寝そべっていて、その解けた髪ほどの毛を岩伝いに垂たらしているのよ。」

「たぶんそうなのだろう」——カルドウッチは眼の前に片手をかざして、赤く染まって浪立つ滝を見つめながら云った——「まさにそうなのだろう。私だって、そう云うよ。」

そして、彼は後に私宛の一通の手紙で、そのように書いて寄こした。その手紙は、彼の作品集に《スプルーガ山 Monte Spluga⁶⁾の悲歌エレジー》と題して再版されている。

夏は去っていった。やがて、カルドウッチはボローニャへ戻らなければならなかった。でも、私の方は居残って、寒気と荒天の中でも山地プラブラを徘徊するつもりでいた。

馬車に座って立ち去っていく彼を、それでも私は見送る。チョッカは、もう馭者台ぎょしゃに乗っていた。大きな縮絨獣毛帽子の影で、いつもちょっぴり怒っているような生氣に溢れた眼差しで私を見詰めている。

「さようなら」——彼は帽子を高く掲げ、灰色グレイの髪あの毛を露あらわにして、私に云った。

「さようなら、冥府神オルコ」——そして、私は続けて云った——「忍耐強く親切に私の相手をして下さって感謝しています。」

「いいさ。」——彼は云う。そして、もう一度「さようなら」をくり返す。それから、彼は、すべてが凍てつきキラキラ光っている平地と白いものを被っている樅モミの樹林や寒々とした大空の中で凍てついた山頂さんちようの巨大な円弧えんこをグルッと見廻す。確かに彼には、この私あがその壮大な純白の世界の中で困惑こんわくして孤立こりつしているように見える。というのは、不意に山々と大空に向かうと、その方を向くように私に指図するかのように手を伸べて、彼が大きな声で叫んでいたので。

「ほら、ご覧よ、小さなアニーがたった一人で雪に埋もれた世界へと立ち去ってゆくぞ！」

チョッカはカルドウッチお気に入りの大袈裟な身振りおおげさで鞭むちをビシッと鳴らす。馬たちは早足ギャロップで渓谷けいこくへと発たってゆく。

私は、雪に埋もれた世界に一人ポツンと取り残される。でも、カルドウッチが巨大な山塊さんかいの世話を私に任せたように思われる。そして、私は、まるで山塊さんかいが私のぐるりを保護者のように親しく取り囲んでくれているように感じる。

山小屋が雪崩の下敷きになって姿を消し、松の木がたわみ、電線がズタズタにされ、《峠》が不通になる頃、私は被いのない籠に乗せられて、二人の山案内人と一人の羊飼いの側で棒のように凍えたまま突っ立って溪谷を下ってゆく。

ポワン-サン-マルタン Point-Saint-Martin⁷⁾ 市の〈郵便旅館〉の亭主は吃驚仰天して私を迎えると、桜桃酒入りの熱い冬菩提樹茶を慌てて作ってくれた。彼の妻は私のゴワゴワに凍っている着衣を脱がせ、私が寢床に入ると、すぐにも一方の手で湯が入った水差しを掲げ、もう一方の手に大きな一切れの脂身を持って戻って来た。

「こちらは両足を暖めるために、これはお腹のために」——彼女は、毅然として宣言する。

私はぞっとする。

「このようなものは、私には食べられません！」——菌をくいしばって、彼女の手からぶら下がっている白くテカテカした一切れの脂肪を眺めやって、私は云う。

「食べるですって！」——彼女は笑って云い張る。そして、母親のように、私の胸にそれを延ばす。「まさか肺炎で死にたくはないでしょう！」

冬菩提樹茶と桜ん坊酒と水差しと脂肪は有難い効力を発揮して、翌朝に私は目覚めると、心が晴れ、空腹を訴える。

ミラノ行きの列車に乗る。ミラノは標高2千メートルの地点より、もっと寒く、運河 Naviglio が私の首筋に灰色の湿気をビューと吹き付けてくる。

私は病気になる。私は発熱して咳をする。冬菩提樹茶と脂肪を頼みの綱にするが、どうにもならない。医師は他の処方を示す。

枕元に、母と私の共通の優しい女友だちのエミーリア・ルツァット Emilia Luzzatto⁸⁾ が控えている。ひとり娘のエヴェリーナ Evelina といっしょに私は学校に通っていた。その彼女は思春期を待たずして、窒扶斯 typhus⁹⁾ で亡くなってしまった。だから、私はエミーリアの大的お気に入り。

「エミーリア奥さん…こっちへ来て！ …（普段は敬意を失わないが、病気のせいで、どうしても私は馴れ馴れしくなる。）お願い…もし私が死ぬ運命なら…」

出来ればそうして欲しかったのに、彼女がそのことばに反撥もせずニコリともしないことに気付く。彼女は「でもね？」と云う。そして、さめざめと涙を流す。

「もし私が死ぬ運命なら…知らせてね…」

「誰に？」

誰？ 私も自問自答する。父さんは、〈お母さん〉と呼ぶことに抵抗を感じる新妻といっしょに横浜に滞在中だ。私の兄妹たちは？ アルナルドは東京だし、フェッルウッチョは紐育で、アンセルモは倍諾愛勤にいる。ルイーズは（倫敦郊外の）キュー Kew¹⁰⁾ に、エーヴァは彼得帝堡にいる。一番身近な存在といえば…ミラノのプロテスタント墓地に眠っている母親だ。

そこで、私は云う。

「カルドウッチに知らせて。」

そこで、彼女は彼に知らせる。

カルドゥッチは、いつに増して暗い顰め面をして、やって来る。無言で、チラッと私を眺めてから、彼は云う。

「よくなるさ。ご褒美をあげよう。」

「ご褒美って？」——私は呟く。

「まあ、お愉しみにするさ」——彼は返事する。そして、出てゆく。彼の姿が見えなくなる。ルツァット夫人まで居なくなる…何もかも消えてしまう。

死ぬためではない。私が眠っているせいなのだ。私は4時間ぐっすりと寝込んで目覚めると、熱が引いている。

「ご褒美って？」——再び姿を見せたカルドゥッチに向かって、私は目覚めるが早いか訊いてみる。彼のかたわらに、エミーリア夫人が喜色満面で控えている。

カルドゥッチがくり返して云う——「お愉しみにしておくさ。今はよくなることを考えなさい。」

私はよくなることを考えていた。カルドゥッチは平然とその場を立ち去って、その後数ヶ月経ってから再び私を見舞いに戻ってきた。

私はミラノ中央駅 Stazione Centrale へ彼に会いに行った。彼の知り合いがたくさんいて、彼に挨拶していた。いつもの私に戻って、彼に二度しっかり接吻をする。頬つべたのこちら側と反対側に。そして、彼はいつもの顰め面のままで、されるがままになっていた。私は彼の片腕に掴まって、駅構内を出た。私たちは、一台の小型馬車を呼び止めた。

それに乗ろうとすると、やにわにカルドゥッチはこわい顔をして私の方を振り向き、「いつも駅では接吻はしないで欲しいのだが」と云った。

私は、驚くと同時に侮辱感を覚えた。

「他の場所で接吻はしません…あなたが出立したり着いたりする折だけに、接吻をします。」——私はきっぱりと云ってのけた。

カルドゥッチは頭を横に振って、「当たり前だ、必要がないじゃないか」とうんざりといった様子で云ってのけた。

「いえ、必要ですよ。あなたに会えた嬉しさに、私はあなたが着くと接吻をしますのです。出立の折には、あなたと別れる辛さに、そうするのです。」

またまた頭に來たように、カルドゥッチは首を横に振った。彼は私に黙って欲しいと、唇に指を付けながら、我慢がならないといったいつもの素振りを見せた。馭者が私たちのことをジッと見詰めていなければ、きっと私は泣き出していたことと思う。

私たちは馬車に乗って、彼の逗留先の旅館へ赴いた。私はすっかり塞ぎ込んでいて、ひとことも話さなかった。

「病気は治った？」——彼がしばらくしてから云った。

「ええ」——私は呟いた。

「ご褒美^{ほうび}を約束していただろ。」

「でも、その時の私は病気だったし。」

「約束のための約束じゃない。」—— カルドウッチは怒ったように云った —— 「ご褒美^{ほうび}を約束したから、貰^{もら}ったら。」

「どんなご褒美^{ほうび}なの？」—— 私は気のない返事をした。

「馬を一頭あげようと考えていたのだ。」

馬を一頭！ 私は咄嗟^{とっさ}に彼の首を抱きしめようとした。でも、彼の禁止事項のことを思い出して、その衝動^{こうどう}を堪^{こら}えた。彼の手をグッと握^{にぎ}った。

「それって、何時？」

「今すぐに」—— 彼は云った。

「今すぐですって！ …」—— 私は気が遠くなった。

「で、馬をどこで買い求めるの？」

「当てがない」—— カルドウッチは云った —— 「〈サヴィーニ Savini〉亭^{ウェイター}の給仕^きに訊いてみるさ。それはそうと、朝飯^{あさめし}にしなければ。」

彼は馬車を定宿^{じょうやど}の〈アンコラ Ancora〉館^とに止めて、そこに荷物を預^{あず}けると、〈ガッレリア Galleria〉まで急いだ。

〈サヴィーニ〉亭^{ウェイター}の給仕^{メトル・ドテル}も給仕長^いも支配人^{くどうおん}も異口同音に、馬は〈タタソール Tattersall〉クラブで購入^{こうにゅう}できると云う。彼らは早速、馬の所有者のロッシ氏のもとに使い^やを遣^わって、私たちが訪ね^{むね}る旨^{むね}を伝えてくれた。

テーブル^{テーブル}につくと、疑問^わが湧いた。

「〈冥府神^{オルコ}〉、お金は充分あるの、馬をかうって云うけど。現金をお持ちなの？」

「ああ、お金ならどっさりある。」—— カルドウッチは云った —— 「昨日、ザニケッリ Zanichelli^{しゃしゅ} 社主に本を一冊売ったから。」

「何の本？」

「どうせ君が読む本じゃないから、気にしないことだ。それは昔の著作の新しい版だよ。すると、ザニケッリはうんと金をくれたのさ。」—— カルドウッチは片手^{あし}を上着^{ポケット}の衣兜に入れた —— 「3千リラくれたよ。」

「3千リラですって。」—— その額面^{ぼうぜん}を前にして、私は茫然^{ぼうぜん}となった —— 「3千リラ！ …」

当初の驚きの気持ちがおさまると、私は意見を述べた —— 「とすると、要するに…詩人というものも、まんざらじゃないってことね。」

カルドウッチはニヤッとになって、「そうなのだ。いけるよ。話はここまでだ」と云った。

でも、私は黙っておれなかった。しばらくして、私は話し始めた。

「ちょっとお話し^{はなし}してはいけなかしら…色と形について…」

「《色と形について》？」—— カルドウッチは眉^{まゆ}を擡^{しか}めて云った —— 「知らないな。誰の作品だったっけ？ どこかの学者さんのだろう。」

「誰の作品って？ …何のこと？」

「君が話題にしている本さ。」

「やめてほしいわ。ほんとに。それって馬の色と形のことよ。」

「あっ、そうか。」——カルドウッチは肩をすくめて、ボソッと云った——「まったくお手上げだ…もうよそう、今は静かに食事をさせてくれないか。」

形については、問題だった。馬は大型でなければならなかった。大きくって、がっしりしてなくては。ところが、彼は大型でも、細身の馬にすると云っていた。しかし、他の特徴に関しては折り合いがつかなかった。私は短い尻尾の白馬が欲しかった。カルドウッチは、長い尻尾の黒馬が欲しかった。

「でも、〈冥府神〉…」

「もう、よそう。」——カルドウッチは云った——「静かに食事をさせて欲しいと云ただろ。」

ところが、カルドウッチは静かに食事ができそうになかった。他の洋卓で朝食をとっていたひとりの哲学教授が彼に気付いて、話しかけて来たのだった。彼らの四方山話が一段落したので、私はあらためて馬のことを話題にした。その教授は、〈タタソール〉クラブに連れて行ってあげよう云った。

私は、渡りに舟と思った。ひとりの教授が、選定に手を貸してくれるというのだから。しかも、彼の兄弟は騎馬隊長ときているのだから、これは好都合だった。

〈タタソール〉の支配人は、慌てふためきながらも丁寧に私たちを歓迎してくれた。彼の周囲に多くの人々が控えていた。調教師に馬丁に厩舎の小僧らは、グルリと輪になって、ジッと私たちを見詰めていた。

ちょうどその時、私たちの前を、灰色と蒼色の馬や茶褐色の馬や栗毛の馬や駁の馬が通り過ぎた。ゆっくりしているのもあれば、速歩のもあった。右回りで全速疾走する馬もあれば、左回りで全速疾走するものもいた。立ちあがる馬もあれば、左右に半旋回するものもあった。

カルドウッチと私は、思案しかねて馬を注視していた。新しい馬が姿を現す度に、私は「これが欲しい！」と云った。

とりわけ私の心を捉えたのは、後ろ脚に綺麗な白の足毛の生えた茶褐色の素敵な馬だった。

ところが、哲学教授は女人風を吹かせて、こうのたまわった。

「白斑脚のは、牛の価値しかない。」

それで、私は冷静になった。

折りしも、まるで〈マルセル Marcel〉風縮れ毛でもあてたかのように縮れた鬣の尻尾の長い白馬が登場した。

「これだ！」——私たち三人は異口同音に云い放った。その仔馬——純血の亜刺比亜馬——は、米国曲馬団 Circo Equestre Americano の女性調教師の所有だったと、ロッシ卿は畳みかけるように私たちに説明した。そして彼が、連れ戻したのだった。

ところが、そこへ種馬がもう一頭登場した。背がすごく高い青馬で、かなり巨大だった。短い

尻尾^{しっぽ}を絶えず動かし、耳も神経質に動かしていた。鋭い眼光を放つ眼は、隅のところが珈琲色^{コーヒー}を点じた白の閃光^{せんこう}がキラッと光っている。

その馬は、まるで地面に触れるのが嫌^{いや}で仕方がないように足を高く挙げて、踊るような足取りで登場してきた。全身黒だったが、両の後脚^{ソックス}には、靴下のように白色^{あしげ}の足毛が生え、片方の前脚もそうだった。

「すごい！」——私は讚嘆した。

かたわらの教授が私に向かって、「三本脚^{ぶち}の白斑馬、それは王様の馬！」と念を押した。

「これだわ。私が欲しかったのはこの馬よ。」——カルドゥッチに向かって熱っぽく私は云った。彼も駿馬^{しゅんめ}に見とれていた。

「黙示録^{アポカリプス}の馬のようだ」——教授が云った。

ロッシ脚は私の興奮した様子を見て、乗ってご覧になりますかと訊^きいてきた。

婦人用の鞍^{くら}が用意された。ヒョイと私は鞍^{くら}に跨^{またが}った。背が高いので、まるで塔の天辺にいるような気持ちだった。

先ず、私は調教場を歩いてグルッと一巡させた。とても歩いている感じではなく、ピョンピョンと跳ね廻るような例^{トロット}の速歩^{そろ}だった。ちょうど私と馬は揃^{そろ}って『ミニョン Mignon』作中の〈卵の踊り〉を演じている格好だった。やがて、私たちは速足^{トロット}で駆け出した。それがものすごい速足^{トロット}だったので、飛び跳ねた瞬間に紐^{ひも}が解^{ほど}けて帽子^{ゆる}が落^{おち}下^りした。それから、緩やかに疾駆^{ギャロップ}を始め、全力疾走を試みた。乗ってみて、申し分のない馬であることを実感した。まるで天馬^{ベガサス}のようだった。

馬を停止させ、鞍^{くら}に跨^{またが}ったまま、私は紐^{ひも}を結び直した。カルドゥッチはこちらへ近寄^{つやつや}つくと、青馬の艶々した首を抱擁した。

教授もこちらへ近寄^{つやつや}つて来たが、用心していた。

「毛並みが何とも云えませんか？」——支配人は云っていた——「この素晴らしい血管網もそうでしょうか？」

事実、青毛の汗馬の首筋や肩に、絡み合った繊細な血管網の全体が浮き出て脈打っていた。教授は、それを半信半疑で調べていた。

「動脈硬化症^{arteriosclerosis}¹¹⁾のはじまりでなければよいが」——彼は呟^{つぶや}いた。

私は鞍^{くら}から降りた。支配人の要望に応じて、他のさまざまな馬を見て廻ったが、どれもその大型の青馬に匹敵するものはないように思えた。そこで、4,5頭の馬が馬場を歩きながら巡回している間に、カルドゥッチは沈黙^{たず}を破^{やぶ}って訊ねた。

「馬の中で、3千リラ以上しないのはどれかね？」

居合わせた人々は、一瞬シーンとなった。やがて、支配人は片手で2度か3度髭^{ひげ}に触ってから返事をした。

「あそこの馬です。」

それは、黙示録^{アポカリプス} Apocalisse の馬だった。三本の白斑脚^{ぶち}の馬だった。

「2700リラでお譲^{ゆず}り致しましょう」——太っ腹のロッシ脚が云った。

咄嗟に、カルドゥッチは片手を財布に伸ばした。支配人は制止するような仕種をして、事務所へ来てくれるようにと云った。彼らは連れ立って、その場を離れた。

私はジツとしておれなくて、側に控えていた飼育係に向かって、「名前は？」と訊ねた。

「フランチェスコ・インパッロメニ Francesco Impallomeni です」との答えが返ってきた。

「…あら、そう？」

失礼にならないように、数分間を置いてから、こちらの意図を説明した——「で、…その馬の名前は？」

「青馬ですか？ レベッカ Rebecca です。」

「レベッカですって！ 何て酷い！ どうしてレベッカなの？」

飼育係は顎をグツと突き出して、蛙みたいに口の隅を〈へ〉の字にした。

「まあ…ご存知で？」

「レベッカですって？」——やりきれなくなって、私は教授の方を振り向くと、もう一度くり返した。

「おそらくバビエカ Babieca でしょう」——博識家が云った——「バビエカというのは、カンベアドル勇者シッド Cid el Campeador¹²⁾ の駿馬の名前です」

「その名前って、気に入らないの」——私は云った。（ロッシ卿と並んでニコニコしながら）カルドゥッチがやって来たので、私は馬の名前を変えたいとせつついた。

「で、どのような名前にしたいっていうの？」

「〈歌謡の戦闘馬 Destrier della Canzone サウロ〉とか名付けたいの。」

「長すぎるよ」——カルドゥッチが云った——「それに、栗毛じゃないしね。」

教授は古典的な名前をたくさん引き合いに出した——〈天馬 Pegaso〉…〈人頭馬 Chirone〉…〈ベレロフォン Bellerofonte¹³⁾〉…。私は、カルドゥッチが辟易して痺れを切らしているのが分かった。

そこで、私は単刀直入に云った。

「ねえ、冥府神、あなたの名前を付けるとすれば、どうかしら？ どことなく眼つきとか性格も、あなたに似ているような気がするもの。〈詩人ジョズエ〉と区別するために、〈ジョズエ馬之介〉と名付けることもできるわ。」

カルドゥッチは機嫌が直った。「結構だ。」——彼は云った——「今はこれぐらいにしておこう。ヴィスコンティ・ヴェノスタ Visconti Venosta¹⁴⁾ 侯爵をスフォルツァ城に訪ねる約束をしていたので。」

挨拶もそこそこに、彼は立ち去った。

教授もそそくさと私に挨拶すると、彼の後を追った。

で、この私は？ …それに馬は？ …どこへ連れていったのだろうか？ どうしてやったのだろうか？ 私は、ボルゴ・スペツツ Borgo Spesso¹⁵⁾ 通りのこじんまりした住居に暮らす親しい友人のルツァット夫人の客になっていた。彼女の玄関先に、この馬に乗って到着する自分の姿が眼に

見えるようだった。…ロッシ卿に私は状況を説明した。彼は紳士だった。私が適当な馬小屋を見つけたまでの間、〈タタソール〉でお預かりすると申し出てくれた。私は厩舎代だけを支払ったのだらう。それがほんの僅かな金額で、一日に付き12リラだった。

一日に付き12リラなのだ！ 一種のむずがゆい感じが両膝を走った…一日に付き12リラ。

毎月、父親は私に200リラの小切手を送ってきた。その度に、私は一月を田舎とか旅館で過ごし、3ヶ月間は無一文だった。そのような時には、田舎で医者をしている兄弟の家に出かけて大人しくしていた。あるいは、今回のように、ルツァット夫人の家に世話になって、しばらくのあいだ彼女の相手をした。

私は早速ボルゴ・スペツ通りへ駆けつけた。気が動転していた私は、蒼白い顔をして、彼女の家に辿り着いた。

「いったいどうしたっていうの？」— 気立ての優しい夫人は、心配そうに大声を出した。

「馬がいるの！」— 私はボソッと云った— 「3本脚が白斑の巨大な青馬が一頭。」

「一休みしなさい。」— いつもの優しい風情で、エミーリア夫人が云った— 「すぐ寝室で横になりなさい。」

体温計を探しに医薬品棚の方へ彼女が行こうとしているのが判った。

別に正気を失った訳ではないと、多少苦勞しはしたが彼女に納得させた。よければ〈ジョズエ馬之介〉を見に来て欲しいと頼んでみた。でも、どのような獣にも、とりわけ馬に対してはどうしようもない恐怖感を抱いている彼女は、知りたいとも思わなかった。

「じゃあ、どうするつもりなの？ どこで飼うおつもりなの？」

「それが…当てがなくて」— 困った私は呟いていた— 「リッカルド議員なら…たぶん…どこで飼ったらよいか、ひょっとしてご存知だとは思わない？」

「私の夫が？」

「ええ。よかったら、何度か彼に乗って頂いてもいいわ。」

ルツァット夫人は、呆れて天を仰ぎ見た。

「そのことは話さない方がいいわ」— 彼女は云った。

そこで、私は黙っていた。

その当時の私の生活は、〈ジョズエ馬之介〉に振り回されていた。街で暮らしたいと思っただろうか？ そうでもない。〈ジョズエ馬之介〉に居心地がより快適だったし、お金もあまりかからなかったのだから、私は田舎に行かなければならなかった。そこで静かな暮らしを望んでいただろうか？ そうではなかった。山や谷間を越えてあちこち速足でも疾駆でも走り回って、〈ジョズエ馬之介〉の調教をしなければならなかった。（二日でも厩舎にいたり、凶暴になった。）倫敦へ旅をして姉妹に会いたいと思っただろうか？ 〈ジョズエ馬之介〉を放置しておくことが出来なかった。私に同行させることなど不可能だった。〈ジョズエ馬之介〉に飼料を与え、泊まる場所を用意し手なずけるために、ますます私は経済的苦境に陥っていった。

私の知人たちは、異口同音にあれこれ助言をくれはした。

「馬を返さなければいけない。売り払う必要がある。カルドウッチに話す必要がある。」

返却するですって？ 売り飛ばすですって？ そのようなことは考えたこともない！

カルドウッチに話せですって？ どのような利益があるっていうの？ 貧乏なのは、彼も私とどっこいどっこいなのに。どうしてしてくれることが出来たっていうの？ それに、彼はこの贈り物を私にしたことであんなにも喜んでた。この世で、それと同じような嫌がらせを私が彼にしてやろうなどといったことが、どうして出来よう。早速、購入した翌日、彼は野外で私が馬に乗っている姿を見たがっていた。私たちは城砦まで行った。私は何度も彼の前を疾駆して見せたのだった。彼はご満悦だった。

「〈ジョズエ馬之介〉は素晴らしい」——彼は云っていた。

「私はレニャーノに行くことになっているが、」——彼は付け加えて云った——「明日の朝、知事といっしょの馬車で。君も来きたければ。馬に乗ってね。」

私は行くことにした。〈タタソール〉で借りてきた婦人用鞍で。その鞍を日向で黒光りしている〈ジョズエ馬之介〉の背の天辺に置くと、私は馬車の前に立ったり後ろに付いたり並んだりしながら速歩も疾駆も思いのまま、それがカルドウッチを大いに満足させるとともに、知事を愉しませることになった。

道のりはかなりあった——実に30キロ。それが、ずっと青馬の速歩だと辛いものだった。約1時間もすると、私の背骨の脊椎が一個一個バラバラになるような感じがした。首が捻れ、左腕に名状しがたい痛みが走った。〈ジョズエ馬之介〉は、並足で進むことがなかった。踊りのステップのような半旋廻様の弱速歩を始める以外は、一瞬たりとも休むことなく、ピョンピョンと跳躍するような速歩を執拗に続けた。その眺めは美しいが、乗馬を強いられている者からすれば、ひどく疲れるものだった。

ところが、カルドウッチは私を眺めて悠然と微笑み、ご満悦だった。私は歯をくいしばって、グッと苦痛を堪えた。

束の間のレニャーノ Legnano 訪問のことは、何ひとつ憶えていない。確かに、翌朝はかなり元気を取り戻し、馬鹿げた行為を反省していた。カルドウッチと知事が控えの間に降りていった間に、私は薪を幾束か使用人に持ってこさせた。そして、それらをバラバラにすると、カルドウッチの鞆に詰め込んだ。やがて、帰途の途中、彼は知事に自分の備忘録を見せようと鞆を開けてみた。すると、私が用意した〈レニャーノ土産〉が彼の眼に飛び込んできた。

「どうしたっていうのだろうか？ これは僕の鞆じゃないぞ。この薪はいったい何なのだ？」——カルドウッチは腹立たしく大きな声で云った。

その時、私は疾駆して馬車をかなり追い越して走っていた。ふと振り向いて見ると、頭にきたカルドウッチが知事に助けてもらって、あたり一面に薪を放り投げていることに気付いた。

「君がこんな馬鹿騒ぎをまた演じてみせるなら、」——彼の声が聞こえる距離になった時、カルドウッチは私に向かって叫んでいた——「馬を取りあげてしまうぞ。」しかし、彼の怒りを、私はそれほど気にしていなかった。彼の洪面と偉大さに怖気付いた人々が彼の方へ近づいて、

どちらかと云えばうんざりするような生真面目な隷属の雰囲気^{きまじめ れいぞく}を彼の周囲^{かみ}に醸し出していたものだから、私は結果的に自分の悪ふざけが彼をたいそうな灰色の仰々^{ぎょうぎょう}しさからリラックスさせたものと信じる。〈ジョズエ馬之介^{カヴァッロ}〉を取りあげるとの脅しめいた処罰^{おど}については、たとえ私が「ええ、どうぞ。取りあげてもいいわよ。いずれにしろ、私にとっては大嫌いな物の代名詞なのだから」と彼に云ったとしても、きっと彼は吃驚^{びっくり}することも苦にすることもなかったに違いない。

私はそんな科白^{せりふ}を口にはしなかった。私に最高に素敵な贈り物をしたと納得して、彼はポローニャへ戻っていった。彼は自分にも私にも〈ジョズエ馬之介^{カヴァッロ}〉にも満足していた。羽振りよく散財したことに、大金持ちでも浪費家でもない彼は満足していたのだ。

3ヶ月経って、〈ジョズエ馬之介^{カヴァッロ}〉のせいで、私は破産^{せとぎわ}の瀬戸際^{せとぎわ}に立たされてしまった。馬の世話のために、何とかお金を稼ぎ続けようと、私は悪戦苦闘していた。そのために、絶えずお金を貸してもらった近親者たちとの折り合いが悪くなってしまった。それに、私は新聞の広告欄^{らん}に、英語、獨逸語^{ドイツ}、フランス語、イタリア語^{イタリア}に加えて、洋琴やギターや歌唱^{ピアノ}の教授^{うた}を致しますとの広告を出した。馬のピョンピョン飛び跳ねるような不遜^{ふそん}な足どりのおかげで、私は絶望の暗黒^{あんくろく}の奈落^{ならく}から質屋^{しちや}の緑の旗印^{さしまよ}まで彷徨^{さまよ}うハメになった。

そして、馬に対して、私は情愛^{いきどお}と憤り^{おうのう}と懊惱^{ぞうお}と愛着^{あいさく}と憎悪^{いだ}の入り混じった複雑な感情を抱くようになった。それは、多大の苦痛^{ひげ}と卑下^{さんざい}と散財^{さんざい}を強いる者に対して人が抱く感情だった。

艶々した馬は、ますます傲然^{つやつや}と意気軒昂^{こうぜん}で傍若無人^{い き けんこう ぼうじゃく ぶ じん あし}に脚を高く上げて進み、怒りにまかせて地面^けを蹴^けった。私はハラハラしながらも恍惚^{こうこつ}として馬^{なが}を眺^{なが}め、その鞍^{くら}に跳^とび移ると、一目散^いに山を越え谷を越え国境を越えて、カルドウッチが気^{うた}に入^{うた}って謳^{うた}ったヴィア・マーラ Via Mala¹⁶⁾に切り立つ深い断崖^{だんがい}に到^あって、馬もろともその淵^{ふち}に落下^{ふち}することを夢想した…

《さあ、太陽神^{アポロン}のような獣^{けもの}よ、私に翼^{つばさ}ある背^さを差し出せ。

ご覧、疾走中^{たづな}のお前^{ことごと}の手綱^{フリー}は悉く自由だ…

不屈^{ひしやう}の戦闘馬^いよ、

飛翔^{ひしやう}しよう、ゼウスの雷光^{いかずち}が雲を引き裂いて、

我^こ々^{じやうか}を焦^こがし浄化^{じやうか}してくれるか、騎士もろともに馬を

急流^{いそ}がのみ込んでくれるまで。》

何故^{な ぜ}そうしなかったのだろうか？ それは、馬^{うま}にとっても贈与^{プレゼント}してくれた者にとっても、見合った行為^{みあ}だっただろうに。そのような栄光^{えいこう}ある最期^{さいご}に相応^{ふさわ}しい人物^{じんぶつ}でなかったのは、おそらくこの私^{わたし}だった。私は腰^{こし}が引^ひけてしまっていた。《心中^{しんじゆう}しよう》と誓^{ちか}い合^あって、やがて最後の一步^{いっ}に到^{いた}ると、片方^{ひと}が弱気^{じやくき}になってしまう恋人^{こいじん}たちのように、私は雄雄^{お お}しく馬もろともに暗黒^{あんくろく}の中へ身^みを躍^{おど}らせる代わりに、〈ジョズエ馬之介^{カヴァッロ}〉だけを死^しなせるようなことをしてかした。

死^しんでくれたらと私は願^{ねが}ったのか？ それは分^わからない。今^{いま}となつては、馬^{うま}が骨折^{こっ}して、私^{わたし}まで死^しの一步^{いっ}手前^{てまえ}にゆくハメになった異常^{いじやう}な破局^{はきよく}を思い出^{おも}したくもない。私^{わたし}が起^{おこ}した事故^{じこ}で、

私は勇敢であると同時に卑怯者でもあった。

でも、一番卑怯だったのは、私がカルドウッチにそのことを話さなかったことだ。

話せば、彼にとって本当に大きな苦痛になることは分かりきっていた。現在、彼は普段より頻繁に便りを書いて寄こし、〈ジョズエ馬之介〉の近況を訊ねてきた。

《かの天馬が君のものであると考えるだに、私は嬉しくなる。素晴らしい贈り物を君に差し上げることが出来たと考えるだに、私は嬉しい。私の思念の頂に、君と馬の姿が彷彿とする。それは、黒い鬘と君の長い髪を風にたなびかせながら、一斉に疾駆し始めた姿だ…このように、おお巡礼者ローレイ Loreley よ、私の視界から君は飛び去っていった。》

私は嘘をつくことを毛嫌いし憎んでもいる。騙していることを除外すれば、すべては納得でき赦されることのように思われる。それでも、当時の私は——その時だけだと云うことが出来ると信じているが——嘘をついて人を騙していた。彼の問いに、私は手短かに云い逃れの返事を書き送った。でも、本当のことを彼に告げる勇気がなかった。

ある日、彼は近々そちらへ行くと云ってきた。

私は体躯が震えた。私は、すぐにも拿破里に赴かなければならないと書いた。かなり先の予定のように思われたが。

それでも、カルドウッチは満足だった。

《馬の金髪フロンドの扇動女性よ、さあ、行きたまえ。もっと高貴な岸辺めざして！》

彼も間もなくその地へ一日だけならやって来ただろう。さる王族の女友だちに挨拶するべく、そして紺碧の地中海浜辺を《高貴な獣の背に跨って》跳ぶように通過する私の姿を見たいがために。

そこで、拿破里に到着すると、私はひとりの詩人に私の窮境を告白した。私に会いにやって来てくれたアルトゥーロ・コラウッティ Arturo Colautti に、お願いだからカルドウッチに直接会って真実をすぐにも話してもらいたいと。

彼はそのような役は御免だ、勘弁してくれと云った。

彼といっしょにいた将校が、私に向かってこう云った。

「どうしてそんな嫌な役を彼に押し付けるのか？ 彼がくれた黒毛の駿馬しゅんめに似た馬なら、当面のところ一頭ぐらい手に入るだろう。」

そこで、必死になって拿破里中を黒毛の馬を探し廻ってみた。(おそらく例の将校——当時は狙撃部隊の隊長だったが、現在は恭しく国防省の職員におさまっているマッジョットは、まだそのことを憶えていることだろう。それから、リッロ・カタラーノ Lillo Catalano 侯爵や…ブルーノ・トッリ Bruno Torri 伯爵も…) 私が滞在していたカラッチョーロ Caracciolo 通りの家の露台の前には、ずらりと競走馬の陰気な列が出来た。太った大型の青馬や痩せた背の高い青馬も、神経質な青馬や黒毛の駿馬しゅんめも、脚に白斑しゅんめがあったりなかったりする青馬もいた…ところが、困ったことに、詩人が贈与してくれた馬とそっくりのは…まったく一頭もいなかった。

結局、マッジョットが連れてきた一頭で決着がついた。

馬の名前は、〈ラス・アルラ Ras Alula〉だった。大型の黒馬で、3本の脚が白斑^{ぶち}だった。しかし、似ているところは、それだけだった。〈ラス・アルラ〉は大人^{おとな}しく、従順で、生きることから降りてしまった他人^{ほんい}本位の馬だった。よく私の高貴^{しゅんめ}な駿馬^{しゅんば}にそうしたように、私が馬^は銜^みや鞭^{むち}や踵^{かかと}でカツを入れて鼓舞^{こぶ}し、後ろ脚で立たせようとしても、〈ラス・アルラ〉は暢気^{のんき}に頭を上下に振って、小走りに駆け出すぐらいだった。くり返し手綱^{たづな}を強引^{ごういん}に引き絞^{しぼ}って鞭^{むち}と拍車^{はくしゃ}を当てると、疾駆^{しつく}させることが出来はしたが、尻尾^{しっぽ}は垂れたままで頭をフラフラさせて、揺り椅子^{ロッキング・チェア}式に身体^{ゆる}を緩やかに動かすので、私はお手上げだった。

「驚かないで下さいよ。」—— マッジョットは黒い髭^{ひげ}を撫^なでながら、大人^{おとな}しい大型の〈ラス・アルラ〉にジッと自分の馬の眼つき以上に熱い視線を送りながら云った——「私が何とかします。」

そこで、彼^{まか}に任せることにした。カルドウッチ到着の知らせが別荘^{ヴィッラ}に入るや、カラッチョーロ通りの中庭で、先ほどから動きもしない巨大な〈ラス・アルラ〉に跨^{またが}ったままで待機していた私は、マッジョットが走ってこちらにやってくる姿を見た。兵士が馬^{でんぶ}の臀部^{でんぶ}へ廻る間、マッジョットは手綱^{たづな}をグッと握^{にぎ}り締めた。

私は急に獣^{けもの}の体軀^{からだ}に震えが走るのを感じた。馬は嘶^{いなな}いて、片脚^けを激しく蹴^けった。

「何をなさるの？」—— 私は叫んだ。

「何でもありません。どうってことはありません。」—— マッジョットは笑っていた——「尻尾^{しっぽ}の下^{うしろあし}へ生姜^{ジンジャー}を少々！」—— そうして、兵士^とが跳^のび退くと、彼は手綱^{たづな}を放した。

生姜^{ジンジャー}の効果は摩訶不思議なものだった。〈ラス・アルラ〉は身震^{うしろあし}いして後脚^{うしろあし}で立ち、空気中^{うしろあし}でもがき、後ろへ倒れんばかりに突^{たづな}立^{むち}った。私は手綱^{たづな}を支えきれず、頭^{むち}に鞭^{むち}を一発ふるって、馬を呼び戻そうとした。すると、馬は頭^{むち}から飛び跳^{むち}ねながら、正気を失ったように駆け出し、中庭の砂利^{じゃり}で火花^{しきいし}を散らせ、敷石^{すべ}の上を滑^{すべ}りながら、もの凄い速^{すこ}さでキアア Chiaia の遊歩道^{プロムナード}を突^{すこ}走^{すこ}った。

こうして、飛ぶように私はカルドウッチの前を通過した。彼は他の人々の一団に混じって、別荘^{ヴィッラ}の建物^{コーナー}の角^{コーナー}のところで、ジッと私を待^{おもて}てくれていた。私は、ただ一瞬^{おもて}チラッと彼が面^{おもて}を上げて私を見た姿は知っている。私は、〈ラス・アルラ〉やマッジョットや人生を憎^{うそ}悪^{うそ}した…何よりも自分自身を憎^{うそ}悪^{うそ}した。こんなつまらない嘘^{うそ}—— 忘れ難^{うそ}い嘘^{うそ}をしゃあしゃあと云^{うそ}ってのける自分を憎^{うそ}んだ。私は、すでに正気を失^{けもの}っていた獣^{むち}を鞭^{はくしゃ}と拍車^{はくしゃ}で刺^{はくしゃ}激^{はくしゃ}した。すると、馬^{いなずま}は稲妻^{いなずま}のように海浜^{いなずま}沿いの道を直進した。

と、不意に、私からまだ距離があったが、銀色^{きんめ}と朱色^{しゆめ}の煌^{きんめ}きを認めた。それは王室専用馬車^{きんめ}で、召使^{きんめ}に先導^{きんめ}されたマルゲリータ王妃^{きんめ}が乗っていた。彼女は、王族^{いげん}の威厳^{いげん}を失^{いげん}わず、いつもの海辺^{いげん}の散策^{いげん}をしていたのだった。

その時、私はどれほど力を込めて、手綱^{たづな}をグイッと引いたことか。追^{たづな}い付^{たづな}いたり、追^{たづな}い越^{たづな}したりしないために、馬^{ゆる}の速度^{ゆる}を緩^{ゆる}めなければならなかった。そのようなことをすると、赦^{ゆる}しがたいマナー^{ゆる}作法^{ゆる}違反^{ゆる}になってしまう。

〈ラス・アルラ〉は、云うことをきかなかつた。私の声も聞かなかつた。馬は歯をグッと喰いしばって、正気を失い狂ったように、疾風のごとくがむしゃらに疾走した。手綱を交互にグイッと引っ張ったり、緩めたりしても無駄だった。馬の口を鋸で引くように、右に左に引っ張ったが、それでも駄目だった…いきり立った獣は、ひたすら疾走した。王妃一行の列に突っ込んで行かないために必要な距離のところで、ほとんど手首を捻挫するぐらい力を入れて、ようやくコースを逸れることが出来たのは奇蹟だった。

一瞬にして私は王妃の面前を通過した。彼女は、私のなで肩と普通でない〈ラス・アルラ〉のたなびいている尻尾が、まるで無礼な黒い稲妻のように立ち現れて消える様子を見届けたはずだ…。

その時ほど、何もかもが、誰もが憎たらししく思われたことはなかつた。鞍から真逆さまに海の中へ身を投げてしまいたいほどだった。

私が聖フェルディナンド教会堂のある高台に着くと、〈ラス・アルラ〉はすぐに大人しくなった。横道で、二度三度大きく滑ったが、教会の中へ入ろうとするかのように舗道の上へ上がった…そして、口を泡まみれにした馬は喘ぎながら停止した。

ようやく私が勇気を奮い起こして、〈ジョズエ馬之介〉がもはや私の所有ではなく…誰の所有でもない…とカルドウッチに宛てて書いても、彼は返事を寄こさなかつた。彼が何を考えていたのか、私には分からない。

人生の偶然が、私を遠くまで連れ去った。

何年も経ってからカルドウッチに再会した時、私はそのことを敢て彼に思い起こさせることをしなかつたし、彼もそのことに触れなかつた…。

現在〈拿破里〉には、あの日猛々しい面を私に向かって挙げた馬の姿を目撃した場所に、その名前を刻んだ固い大理石像が建っている。

しかも、それは似ていない。

註及び参考文献

本稿で使用したテキストは、Annie Vivanti (1866-1942), *Gioia!* (Firenze, R. Bemporad e figlio 1921) で、本短編集所収の『太陽神の見本市 — カルドウッチの思い出』と題する第8章(151頁から185頁まで)を本邦初訳として試みに邦訳・紹介してみた。

先に京都外国語大学『COSMICA』XLV(2016平成28年1月)誌上に、アニー・ヴィヴァンティの本短編集『感激』邦訳(その1)でIV.《輝く妖精》(*Fata luminosa*)を本邦初訳と題して邦訳・紹介したが、彼女の別の短編集 *Perdonate Eglantina* (1926, Mondadori) が昭和17年5月15日に柏熊達生(かしはくまたつを)によって翻訳され、『女人心情記』(附現代伊太利短編選集)の標題で解題を兼ねた譯者の言葉を冒頭に付して(株)日本出版社から『イタリア文学選書』の1冊として3000部出版された際に、補遺として(273頁~288頁) *Fata luminosa* を『喜悅』所収『輝く天女』の標題で、すでに翻訳・紹介されていることが判明した。

柏熊達生氏の労作は、戦時下にイタリア文学研究家の岩崎純孝氏の要請で多忙裡に翻訳・編集さ

れたにもかかわらず、一読して達意の譯であることは論を俟たない。柏熊氏はヴィヴァンティが当時すでにノーベル文学賞受賞女性作家グラーツィア・デレッダや著名な女流詩人アーダ・ネグリ以上に欧米世界に広い読者を有し、英・伊・佛・獨の四か国語を自由に操って、欧米諸国の新聞雑誌に論陣を張る稀有な世界市民であることに言及されている。『女人心情記』は2001年正月10日に(株)本の友社から全11冊セットで《イタリア文化選書》と改題した双書所収の1冊として復刻版が刊行されていることから判るように、バイオニアの秀作であることに変わりはないが、当時のファシスト政権下の伊太利聖大使館情報官ミルコ・アルデマーニの推薦文を邦訳して巻頭に掲げたことは、戦後進駐軍の占領政策下で関係記者にとり少なからざるマイナス要因になったかと推察される。ご興味のある向きには、*Fata luminosa* の拙訳と柏熊達生訳とを読み比べてご覧になることをお勧めする。

本短編には、A. ヴィヴァンティ一家の^{コスモポリタン}世界市民ぶりが、再婚した父親は新妻と横浜に、兄妹のアルナルドは東京に、フェッルウッチョはニューヨークに、アンセルモはブエノス・アイレスに、ルイーズは^{ロンドン}(倫敦郊外の)キューに、エーヴァはペテルスブルクに在住だと、回想風に言及されている。

- 1) walser 方言では、Greschóney, creschnau と称し、ドイツ語では Greschnoneytitsch あるいは略して Titsch とか Kressenau と称された Valle d'Aosta 州の村
- 2) カリフォルニア州のエル・ドラーダ県の町
- 3) 高等女学院をミラノに開設して、校長として26年間教鞭をとった反ヴェリズモ詩人 (Treviso, 22 ottobre 1828 - Milano, 9 settembre 1889)
- 4) ロンバルディア州ソンドリオ県の一地区
- 5) サヴォイア家のマルゲリータ王妃とベック・ペコーズ男爵との秘められた愛の巣
- 6) ロンバルディア州ソンドリオ県マデジモ地区 (海拔 1908 メートル)
- 7) ヴァッレ・ダオスタ自治州
- 8) ウィーン生まれで、リッカルド・ルツァットと結婚してミラノに暮らした^{サロニエール}社交界女性
- 9) リケッチア Rickettsia prowazeki を保菌する鼠、蚤、蝨等に媒介される急性伝染病で皮膚発疹と暗紫色の血液を特徴とする。
- 10) ロンドン郊外のキュー Kew といえば、名実ともに世界随一の王立植物園 Royal Botanic Gardens, Kew でよく知られている。1980年代後半、英国セミナー期間中に筆者は〈ルネサンスにおける大プリニウス〉という研究テーマに取り組んでいた関係で、『博物誌 Naturalis Historia』に記載されている植物の同定問題を解決するためにこの通称 Kew Gardens を訪れ、1759年にジョージ3世の母オーガスタ妃によって開設され、120万平方メートルの敷地に栽培されている約2万5千の植物と、5百万点の標本を所蔵する標本館等をつぶさに調査する機会を得た。
- 11) 形態学的に粥状硬化症 atherosclerosis, 中膜硬化症 medial sclerosis, 細動脈硬化症 arteriosclerosis に3分類され、老化現象、遺伝的素因、高血圧、内分泌および脂質代謝異常、感染や中毒など諸因子が考えられる個人差や臓器差の大きな病気
- 12) ビバル城主ロドリゴ・ディアス (1043頃-1099) のことで、ムーア人に仕えながらバレンシアを解放、アル・ムラビト朝のカリフ、ユーフスによって殺害された英雄
- 13) 古代コリント王ベッレロを殺した英雄
- 14) エミリオ・ヴィスコンティ・ヴェノスタ侯爵 (1827-1914)
- 15) ミラノのモンテナポレオーネ通りとデッラ・スピーガ通りに囲まれた名店街
- 16) スイス・アルプス山中の深さ300メートルの地峡

『南山堂医学大辞典』1985 南山堂

『最新医学大辞典』1990 医歯薬出版株式会社

Annie Vivanti, *Racconti americani*, 2005, Sellerio editore Palermo

Annie Vivanti, *Marion artista di caffè-concerto*, 2006, Sellerio editore Palermo
永井荷風著 『珊瑚集』 1913 柊山書店

